

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶ 1



青春の道標

私が生まれ育ったのは、信州松本
の街中である。今は「蔵のある町」として旧城下町の観光スポットにもなっている市の中心、中町二丁目の商家(薬局)であった。十数代も続く中嶋家のいわゆる本家でもあり、元来は松本藩の御用鍛冶(大名の刀工)で、今でも祖先が造った日本刀と「御用」と書

れる開智学校に象徴されるように、教育熱心で文化的な香りの高い都市であった。そのような環境で手広く営業していた薬局の一人息子だった私は、何不自由なく幼少期を過ごしていたといえよう。三年間通った市立松本幼稚園、美ヶ原から流れる薄(すずき)川の畔の源池国民学校(三年生で終

戦となり、小学校になった)、新制の市立清水中学校と育てきたのだが、い

かれた看板が残っている。

母方の祖先は松本藩士であったが、同じ街中の商家(時計屋)になっていた。家の裏には市中を三分する女鳥羽(めとば)川が流れ、東には美ヶ原高原が山並みを成し、西には北アルプスの嶺々がそびえていた。

ずれもよい教師に恵まれ、いつもクラスを代表する存在としての場も与えられていた。

松本市は戦災を免れたが、戦末期には市内から安曇野の田舎(梓川村)に疎開し、玉音放送はそこで聴いた。子供心にとても悲しくなり、声を出して泣いたことを覚えていた。私たちは典型的な「墨塗り世代」(教科書のそれま

だ、日本最古の小学校として知ら

実家倒産で突然の逆境

で戦争を鼓吹していた部分を教室で墨で塗りつぶして使用した世代)で、こうして幼少期に価値の大転換にさらされたのであった。

とはいえ、個人的にはバイオリンを習ったり、絵画が県展に連続入選したり、陸上競技では中学生の県記録を作ったりと恵まれた幼少年期を過ごしていた私が、もう学校にも行けなくなるかと思われた不幸に突如襲われ、辛い逆境に陥ったのは、希望に満ちて入学した松本深志高校の一年生のときであった。今日風にいえば、我が家が倒産したのである。

なかじま みねお 一九三六年松本市生まれ。東京外国語大学中国科卒。東京大学大学院社会学研究科(国際関係論)修了。社会学博士。77年東京外大教授、95年から01年まで同学长。98年から01年まで国立大学協会副会長。04年から公立大学法人国際教養大学理事長・学長。文部科学省中央教育審議会委員(大学院部会長)。「現代中国論」「中ソ対立と現代」「北京列強」など著書多数。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶2

松本で育った私が今振り返ってみてつくづく感じるものの一つは、幼稚園から高校まで、本当によい教師、よい教育者に出会ったことであった。のちに自ら大学の

一番お若かった担任の杉浦眞美先生は今もご健在だが、寒い冬の日

に私たち園児をコートのかなかに包んでくれたぬくもりが忘れられない。

今年が創立百周年の源池国民学校（小学校）は、町の外れの薄川の畔にあったので、学区で一番

遠くから通った。近くサイトウキネンのオペ

青春の道標

ラのために、こけら落としをする巨大な市民芸術館の場所は深志公園といって、よく野球をやった広

場や庭園風の池があったが、そのあたりを通過して行った。教育勅語

が納められていた奉安殿に一礼して学校に入る緊張感が懐かしい。

者ではないかという思いを一層強くした。ところが近ごろは、「教育の信州」がかなり地盤沈下しているようで、残念でならない。

私の幼少期を振り返ると、百二十年近い歴史をもつ市立松本幼稚園の園長は、郷土史学者としても

著名な一志茂樹先生だった。当時

三年生で終戦となり、復員して

三年生で終戦となり、復員して

良い教育者と出会う

来られた四年生のときの金井庄平先生は、「民主日本」の建設に情熱を注がれたが、ある事情で教頭の伴良次先生が担任になった。薄川で鉱物採集の石を拾ったり、美ヶ原で高山植物の標本を作ったりと、野外教室が素晴らしかった。

そんなある日、小学校の校庭をジープが勢よく横切って視察に来た。米進駐軍の教育担当将校で確か名前はウイリアム・ケリーとあったが、生徒との懇談があつてアメリカの小学校について私が質問すると、通訳を介して丁寧に説明してくれた。だが、彼は教卓に腰掛けたまま、軍靴を生徒の机の上に投げ出して答えていたのである。その姿に、「日本は戦争に負けたのだ」と強く思ったことを覚えてる。

中嶋 嶺雄 ▶▶ 3

国際教養大学学長

戦後、義務教育の場としての新制中学校がスタートした。三年目に入学した松本市立清水中学校は、私にとつて思う存分に少年期の青春を燃やした場所であった。

一年生の担任は慶応の仏文で豊島與志雄の教えを受けたという国語の土谷繁富先生で、『校報』

や生徒会誌『窓』の編集委員として薫陶された。

卒業までの二年間は、文部省教科書『民主主義』（上下）をテキストにした社会科の嶋田正次先生が担任で、徹底した生徒会活動を指導していただき、クリスチャンとしては「心の奥の奥のそのまた奥の良心」をいつも説いていた。

当時の松本市には市立の新制中

青春の道標

学校が五校あり、スポーツでは浅間温泉に近い県営競技場での五校競技会、音楽では松商学園講堂での五校音楽会が毎年催されて、全市の中学生にとつて一大イベントであった。クラブ活動はこの二つの行事と生徒会主催の秋の文化祭に集中していた。

五校音楽会で私が女子コーラスの指揮者に

選ばれたり、バッハの「二つのパイオリンのための協奏曲」を同窓生と合奏したり、また「終戦直後」と題した私のクラスの仮装行列が人気だった文化祭を取り仕切ったりと、これらの行事のいわば主役となった。

特に私が短距離選手兼キャプテ

上高地描き山のとりこに

ンを務めた陸上競技は、清水中学が圧倒的に強く、県の総合体育会でも四百メートルレーなど優勝した。毎日暗くなるまで練習したが、そんなある日の夕刻、女鳥羽川畔の市役所前まで来ると、新聞の「号外」が鳴り物入りで配られていて、朝鮮動乱のぼつ発を知らされた。

子供のころから絵も得意で、山岳画家の古市幸利先生や水彩画家の白山卓吉先生に習って、中信美術展や長野県展に入選したのも中学生のころだった。三年生のときに、晩秋の上高地へ独りで行ってイーゼルを立てて穂高連峰を描いていると、『信濃毎日新聞』の記者が写真入りで記事にしてくれた。山に魅せられ、高校、大学と山岳部に籍を置くようになった原点はこのときであった。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶ 4

松本が文化の香り高い都市だったというのは、町の文化人の尽力で松本音楽院が終戦の翌年に設立されたり、旧制松本高校があったりしたことなどだけではない。

戦時中の疎開ということもあつたが、著名な文化人が大勢松本周辺に来ていた。薄

川上流の温泉・霞山荘には陶芸家のバーナード・リー

チがよく来ていた

し、浅間温泉には洋画界の重鎮・石井柏亭が逗留（とつりゆう）していた。石井画伯の寄宿先「せんきの湯」は一般の湯客はとらなかつたが、わが家はよく使わせてもらったので、立派なひげをたくわえた柏亭先生とは子供のころから

湯船でよく一緒した。

恐れ多くて話ではできなかつた

が、中学一年のとき中信美術展に初入選した「夜の書棚」と題する二十号の水彩画を展覧会場で褒めていただいた喜びは忘れがたい。

柏亭先生のお嬢様の画家・田坂ゆたかさんとは今も時々お会いして

青春の道標

いる。北アルプス山ろくの烏川村（当時）が生んだ天折（よつせつ）の日本画家・山口

蒼輪先生や廣（かん）作論争で有名になった洋画家・滝川太郎先生もよくわが家に立ち寄られた。

私の父（高雄）は、俳号を晴陽

といい、異色の女流俳人・鈴木しづ子を生んだ松村巨湫主宰の俳誌

『樹海』の最高同人であった。わが家が『樹海』の前身『清淳集』

多くの文化人が松本に

の編集発行所や中信俳句作家クラブの事務局になっていたこともあって、東京から巨湫先生や長野から『科野』主宰の栗生純夫先生、現在は『りんどう』主宰の地元の藤岡筑邨先生らの俳人や文化人が多く出入りしていた。そんなことから若山牧水夫人の若山喜志子先生もよく来られた。私のヴァイオリンを聴いてくださったときの白髪の高貴な姿が印象深い。

同じ町内の中町には彫刻家の太田南海、書道の眞野竹堂、民芸の丸山太郎の諸先生も住んでおられ、子供のころからいろいろ教えられた。中町からは駐西独大使を務めた吉野文六氏さんが出ており、わが家の二軒おいて隣のお兄さんが上智大学名誉教授（外交史）の三輪公忠氏であった。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶5

今日、スズキ・メソードとして全世界に広がる幼児音楽教育運動は、鈴木鎮一先生の松本音楽院が源流である。松本音楽院はやがて才能教育研究会となり、この三月末には天皇・皇后両陛下そして高田宮妃殿下ご臨席のもと、三千人の子供たちから成る第五十回グランドコンサートを東京の武道館で開催した。

私は大会委員長だったので子どもたちと一緒に合奏したが、この八月中旬には台北でアジア大会があり、バイオリン持参での記念講演に招かれた。音楽通の曾文恵・前総統夫人が名誉会長だった。当初の松本音楽院には、バイオ

青春の道標

リンのほか声楽（主任は副院長の森民樹先生）、ピアノ（主任は鈴木静子先生）があり、下横田町の粗末な木造二階建てを借りたものだった。しかし、その中身は大変なもので、すでに名声のあった豊田耕児さんがフランクのバイオリン・ソナタで鈴木先生のレッスンを受けていた光景などは、

時代がまだ終戦直後だということを考え、実にかげがえのない芸術活動であった。その松本音楽院の鈴木鎮一クラスに母（綾子）に連れられて私が入ったのは、街角に雪が残る一九四七年（昭和二十二年）一月であった。満九歳だったから、「どの

」と、

バイオリンで厳しい練習

子も育つ、育て方ひとつ」という対象年齢からはみだして、上達も遅かったが、「耕ちゃん」（豊田氏）のような天才が近くにいたので、音楽の道に進むことなどは、当初から考えなかった。

しかしバイオリンを習ったことは人生の大きな財産であり、今でもしばしば仲間と合奏したり、わが家でカルテットをしたり、東京外大の新キャンパス・オーブニング式典でプラームスの大学祝典序曲をコンサートマスターとして弾かせてもらったりと、多忙な日常生活を癒やす最大の糧になっている。

先年満九十九歳で他界された鈴木先生はその意味で生涯の恩師であり、近くで接した先生の実生活や私個人への教育という点では、巨大な反面教師でもあった。

中嶋 嶺雄 ▶▶ 6

国際教養大学学長

わが家に突然起こった悲劇は、深志高校一年の時であった。中嶋薬局は市内で一、二を競う規模で繁盛していたのに、ある日、手形が不渡りになったといつて、父は店を閉めてしまったのである。

「中嶋薬局がつぶれた」といううわさが広まる

なか、それから親戚(せき)

会議を開いたり、問屋や銀行

が入りしつたりの大混乱であった。親戚筋に金融業者がいて頼ったところ弱みに付け込まれてひどい目にあつたり、親戚の紹介で事件屋風が力になってくれるというので頼んだら、金融業者と連携してわが家の財産を狙つたりといった具合であった。

青春の道標

そんな混乱のなか、気弱な父は寝込んでしまい、店員も四散するなど、母と長男で一人っ子の私しか周囲にいなくなつてしまった。ご近所や遠い親戚、それに薬品問屋の社長さんなど、温かい手を差し伸べて下さる方もあつたが、散

々わが家でお世話したのに急に冷たくなつた人たちもいて、世

の中の表と裏を痛くほど知らされた。

中嶋薬局は大正製薬の信越総代理店だったので、なんとか支援してもらえないものかと、私自身が単身汽車で上京して出張員宅に一晚泊してもらい、翌日の本社の返事を期待したのだが、やはり無理だった。そのときの八王子郊外恩

不渡りで世の裏表知る

方村の夕日が忘れられない。

結局、十一月の文化の日の夜更けに父母と私の親子三人で、土蔵が二つもあつた家屋敷をはじめ、私が北アルプス山ろくの集落、島々宿(しましましゅく)まで約二十キを寒風にさらされながら自転車薬を売りに行ったアルバイト代で手に入れた電蓄や、父が集めた橋本明治画伯の掛け軸など、財産をすべて無くして裏木戸から生家を去つたのである。債権者会議では「どうか学校にだけは行かせてください」と私が頭を下げた。なぜこんなことになつたのか。中嶋家の家系には、獅子文六の小説『大番』に登場する兎町で切腹した大相場師・中嶋豊次郎という人物がいるが、父も株で大損をしたのである。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶ 7

わが家の混乱が収まると、四カ月ぶりに復学したが、学業の遅れもあって、いささかショックであり、また同級生との再会がつらかった。

しかし、わが家が逆境に落ち込んだがゆえに、私の進路は理系から文系へと明確に転換し、社会の在り方に批判的

な高校生になっていた。家の不幸がなければ、私は郷里で医

か薬剤師になっていたかもしれない。

近く創立百三十周年を迎える松本深志高校は、旧制松本中学以来の自治を受け継ぎ、城山に近い丘の上にアカデミックなレンガ造りの校舎を誇っていた。

岡田甫校長は旧制広島高校の教

師として体験した原爆の悲劇を、

ヒューマンイズムの見地から全校生に向かつて淳々と語られた。二年次担任の小松孝志先生は後に長野県教育長にもなられたが、私が最

も得意な科目で成績もトップであった世界史が専門であり、三年次担任の一般社会担当の平沢武男先

青春の道標

生は、「真理は平凡なり」が motto で、気さくに生徒の悩みを聞いて下さった。

特に私が影響を受けたのは二年

次から正課として始まったフランス語の並木康彦先生（後に中大教授）である。ベレー帽姿のダンディズムに加えて実に型破りの教師で、浅間温泉の下宿を訪れては徹夜で人生論を話し込んだ。東大仏

高校で仏文化に親しむ

文の渡辺一夫教授のまな弟子だったので、私たちは夏休みに渡辺先生からモーパッサンの短編「首飾り」の講読を受けるといふ特権にも預かった。

今は俳人としても著名な藤岡筑邨先生には古文を習ったが、映画評論にたけておられ、名画をよく鑑賞した。後に「邪馬台国論争」で一躍著名になった国語の古田武彦先生は、自説を述べて止まるところを知らない熱血漢であった。

深志高校では山岳部員でもあったが、フランス語とフランス文化を学ぶ「ゴローア協会」を私が中心で立ち上げ、深夜までキャンプファイアーが尽きない秋のどんぼ祭（文化祭）には、冊子『シャノン』を発行してランポールの詩や「自由を我らに」の歌を楽しんだ。

だ。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶ 8

松本深志高校は県下随一の進学校であったが、生徒は秋のトンぼ祭が終わるまであまり受験を気にせず、浪人もよい人生体験だといった気風が強かった。私も一浪組だが、予備校などとは全く無縁であった。

浪人生のとき

の思い出は、夏にフランス語仲間の山根二郎君と西村俊彦君を

青春の道標

浪人生のとき、夏にフランス語仲間の山根二郎君と西村俊彦君を誘ってテントを担ぎ、まだほとんどの人入っていない北アルプス黒部源流の雲の平へ行ったことである。山根君は後に東大紛争の全共闘側の弁護士として勇名をはせるが、当時からけんか早く、折角三人で大縦走してきたのに、烏帽子岳の頂上でささいなことから私と

大口論となり、二人して岩場から転落するところだった。

白状すると、この山行には私の秘め事が隠されていた。中学のときからある女性に恋したのだが、失恋なのかと思ひ込み、スタンダールの『恋愛論』を読み、彼女の

らった。その間、独りで西穂高岳に登っても傷心癒やされず、再び親友を山に誘ったのである。

そんな次第であったが、やはり受験が近づくと勉強を始めた。

フランス語をいかして東大で仏文学をやるのかとも思ったが、戦後世界の變動に関心が向い始め、特

望志科中国科の珍しさ

に周恩来とネルーとの平和五原則外交や中国革命の成功に鼓吹されていた私は、東京外語大志望に強く傾いていた。

願書を書くときに中国科かインド科か迷い、結局中国科に決めたのを覚えている。松本の私の周辺では「嶺ちゃんも中共にかぶれた」とのうわさも立つほど当時はまだ珍しい進路選択であった。

入試ではフランス語が最高点だったらしく、「なぜ中国科に行ってしまったのか」とフランス科主任の鈴木健郎教授が入学直後に呼び出して下さった。入試に面接があり、志望理由を問われたので「外語大には串田孫一先生がいるからです」と躊躇（ちゅうちよ）なく答えた。名著『若き日と山』は当時の私のバイブルであった。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶9

東京外国語大学の中国語専攻は当時正式には第六部第一類といった。通称も中国語学科ではなく中国科が正しいのだが、その背景には語学中心か中国研究も含むのかといった外国語大学に固有の問題があったといえよう。

しかし当時の

中国科は暗記と毎時間テストによる特訓方式の長谷川寛先生

と、日本の中国語学界の代表的存在で後に学長になられた鐘ヶ江信光先生というお二人の助教授の授業など、すべてが語学中心であり、期待していたような中国革命なり「毛沢東思想」に言及されることはまったくなかった。

そこで私は卒業論文を、わが国

で最初に「地域研究」を唱導されたお一人の河部利夫教授の世界史ゼミで書いた。題目は「階級の論理とナシヨナリズム」であった。あこがれの串田孫一先生は倫理学担当で、山岳部長だったので、私も山岳部に入部した。食堂脇の

青春の道標

小屋が部室で、串田先生もよく来られたが、『若き日の山』を耽読（たんどく）

したことを近くで告白する機会には、在学中はついになかった。

当時の外語山岳部は、大谷一良氏（版画家）や三宅修氏（山岳写

真家）らの上級生が、串田先生中心の山の芸術誌「アルプ」にかかわったり、モンゴルに海外遠征し

たりと、たいそう盛んであったが、

あこがれの山岳部入部

やがて私は学友会（自治会）の委員長に選ばれ、学生運動に時間を割くことになったためもあって、本格的な登山は、新人生の夏の北アルプス奥又白谷をベースにした前穂北尾根での訓練が主なものであった。

一年生で砂川基地反対闘争に二年生で原水爆禁止運動に参加した私は、三年生のときの勤務評定反対闘争のリーダーであった。三日間のストライキを提起して教授会で退学処分前だったが、当時の教務補導部長が英語で有名な小川芳男先生で、私にとっては運命的な出会いとなった。

外語名物の語劇と一緒に文化祭が中野公会堂で催され、私がバイオリンを独奏したときには、「勤評反対！」とやじが飛んだ。

中嶋 嶺雄 ▶▶ 10

国際教養大学学長

一九五八年の勤務評定反対闘争論家）・香山健一（後に学習院大は、警職法反対闘争と運動して高学教授）両氏の主導下で、既成揚していった。なかでも和歌山での反対運動が全国的な決戦場になり、当時、東大の西部邁君（現在、評論家）らとともに都学連の執行委員にもなっていた私は、全学連オルグとして和歌山へ行くことになった。その日がたまたまアマチュアの都民交響楽団の日比谷公会堂での公演だったので、演奏会用の黒いスーツを東京駅で着替えて夜行列車に乗った。

青春の道標

東大の森田実（現在、政治評

論家）は、警職法反対闘争と運動して高学教授）両氏の主導下で、既成揚していった。なかでも和歌山での反対運動が全国的な決戦場になり、当時、東大の西部邁君（現在、評論家）らとともに都学連の執行委員にもなっていた私は、全学連オルグとして和歌山へ行くことになった。その日がたまたまアマチュアの都民交響楽団の日比谷公会堂での公演だったので、演奏会用の黒いスーツを東京駅で着替えて夜行列車に乗った。

東京外大では委員長私が、その語学力で全学連国際部長になっていた一級上のロシア科の志水速雄君（後に

学生運動の高揚は、翌五九年秋から日米安保条約改定反対運動へと発展していく。そのころの全学連は東大の森田実（現在、政治評

論家）は、警職法反対闘争と運動して高学教授）両氏の主導下で、既成揚していった。なかでも和歌山での反対運動が全国的な決戦場になり、当時、東大の西部邁君（現在、評論家）らとともに都学連の執行委員にもなっていた私は、全学連オルグとして和歌山へ行くことになった。その日がたまたまアマチュアの都民交響楽団の日比谷公会堂での公演だったので、演奏会用の黒いスーツを東京駅で着替えて夜行列車に乗った。

学生運動の高揚は、翌五九年秋から日米安保条約改定反対運動へと発展していく。そのころの全学連は東大の森田実（現在、政治評

論家）は、警職法反対闘争と運動して高学教授）両氏の主導下で、既成揚していった。なかでも和歌山での反対運動が全国的な決戦場になり、当時、東大の西部邁君（現在、評論家）らとともに都学連の執行委員にもなっていた私は、全学連オルグとして和歌山へ行くことになった。その日がたまたまアマチュアの都民交響楽団の日比谷公会堂での公演だったので、演奏会用の黒いスーツを東京駅で着替えて夜行列車に乗った。

安保闘争の真ただ中に

在、世界平和研究所参与）が「今日、志水がばくられるのでよろしく」と私にささやいた。と見る間に志水君は装甲車を乗り越えて警官隊と衝突、公務執行妨害で逮捕された。

以後、「安保反対、岸を倒せ！」のスローガンの下に連日国会周辺を数十万のデモが取り巻き、宿命的な六月十五日を迎えたのである。戦後の日本がなんとなく大きな岐路に立っていたと感じられた危機意識が大衆的に噴出したのであり、具体的に日米安保条約の条文を読んで、日本の安全保障の先行きを危惧（ぐ）したわけではなかった。その点では、あれほどの反対にもかかわらず安保改定をやった。遂げた岸信介首相は、見事であった。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶11

安保闘争への高まりの中で、気がつくとは私は大学卒業の年になっていた。迷った末に、秋のある朝、予告もせず小石川の小椋広勝先生のお宅をお訪ねした。小椋氏は財団法人、世界経済研究所の理事長を務める経済学者で、外語祭の講師にお招きした方だった。小さなお宅は玄関まで本だらけで、是非世界経

青春の道標

済研究所に入りたいと願うとする、生活の保証はできないが、それでもよければ。ただし試験をする」とのことであった。

当時私が住んでいた新大塚のアパートに近い同研究所で、英語とフランス語の試験と、岡倉古志郎氏（国際政治）、陸井三郎氏（ア

メリカ研究）による面接を受けた。翌日、岡倉先生からはがきが来て採用が決まったが、給料は大学卒初任給の約五分の一の三千円だった。中国研究は姉妹機関の中国研究所がやるということで、欧州共同市場を中心に英語やフランス語の

新聞・雑誌を読んで訳すことが仕事だったが、先輩の野村昭夫所員（後に東京

経済大教授）から赤字をいっぱい入れて懇切に直されたことが、私の語学力をどんなに高めてくれたことか。

こうして一応就職が決まり、就職免許もないのに週一日は杉並区の高千穂高校で英語の非常勤講師もすることになった私は、和歌山

就職先で語学力磨く

の勤評闘争の際に出会った奈良女子大理学部三回生で当時は自治会副委員長だった女性（小林洋子）が東京の中学校教諭に決まったこともあって、岡倉先生ご夫妻に仲人をお願いして学士会館で会費制の結婚式をした。

一九六〇年代初頭、中ソ論争が大問題になるにつれ、私は中国も分析するようになり、「エコノミスト」などの雑誌にも寄稿するようになった。そんなある日、所員会議の席上、T氏が興奮して「研究所にアメリカ帝国主義の手先がいる！」と言いだした。私はもともと「トロツキスト的傾向がある」として日本共産党に入党を拒否されていたので直接関係なかったが、日共内部の修正主義者狩りがあるに研究所を襲ったのである。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶ 12

世界経済研究所は、四半期毎の『世界経済年報』を刊行したりして、苦しい経営ながらも十二—十三人の所員が研究に専念していた。そこに「現代修正主義」が発

生したというのだが、離党をよぎなくされた共産党幹部・春日庄次郎氏の影響を一部所員が受けていたことは事実である。

所員の間でも先輩格の千葉秀雄氏（後に芝浦

工大教授）は、春日氏とは戦時中の検挙で共に宮城刑務所にいた時から親友で、千葉氏が市民派の主婦などを誘って組織した「ラッセル平和財団支持者協議会」の勉強会が私のアパートで行われた際には、春日氏も来られたことがあった。

青春の道標

なお、私の記憶違いでなければ、「ベ平連」つまり「ベトナムに平和を！市民連合」という呼称は、右の協議会の提案によるものであった。

そのころの私の活動としては、現代思想研究会のことが忘れられない。学生運動はその後いわゆる

セクト化に堕して行ったが、安保闘争を完全な敗北ととらえた私たちは、「今こそ国会へ」（『世界』一九六〇年五月号）の文章とともに六〇年安保闘争の知的リーダーであった清水幾太郎氏（学習院大学教授）を中心し、同年初、現代思想研究会を結成した。

翌春には月刊誌『現代思想』を現代思潮社から刊行することになった。

清水先生との出会い

り、私は編集委員になった。編集を担当したことから、当初会に参加した評論家の村上一郎氏や会外の論客・佐藤昇氏、山田宗睦氏らにも会うことができた。

多くの話題を呼んだ現代思想研究会ではあったが、雑誌は黒字だったのに第七号で終刊とした。そこには「再出発にあたって——われわれの視点」と題して高根正昭（後に上智大教授）、三浦つとむ（哲学者）の諸氏らと私の六人が書いている。

清水先生とは、国会前の路上で香山健一氏から紹介されたのが最初であったが、仲間と狹窪のお宅に伺ってはよく議論をした。結局私が先生の最晩年まで親しくさせていただいたのだが、第一級の知識人の鞆（つよ）さと孤独を間近に見たような気がする。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶ 13

世界経済研究所は一九六三年からアジア・アフリカ研究所に変わったが、内紛のおおもりもあり、私は将来性に疑問と不安を感じていた。六〇年安保を闘った学生運動の仲間は、新しい出発を期して大学院に入ったたり米国へ留学したり始めていた。

私は国際関係論という学際的な新しい学問に強い関心があったので、それなりの準備をして、友人と一緒に東大大学院社会学研究科国際関係論課程を受験した。受験者の専攻から隔たった地域の問題が出るとの慣例で、インドネシア現代史が出題され、中国語も現代文だけでなく、古い文章も出したが、研究所にいたかいてもあって、

私は国際関係論という学際的な新しい学問に強い関心があったので、それなりの準備をして、友人と一緒に東大大学院社会学研究科国際関係論課程を受験した。

青春の道標

遠巡（しゅんじゅん）されていたが、「まあ、いいでしょう」と引き受け下さった。

当時、国際関係論課程には、気鋭の中国政治史学者・衛藤藩吉助教授がおられ、衛藤先生は後に「中嶋君は僕の授業を拒否しまして：」とよく言われたが、アカデミズムに疎かった私には、江口先生しか念頭になく、また衛藤先生の授業が土曜日だったので、週末は

自由に学んだ大学院時代

私が生活のために開いていた「霞ヶ丘バイオリン教室」のレッスン日に当たっていたからでもあった。なお、その時の私の生徒の一人が、異色の社会学者として現在活躍中の宮台真司君である。

国際関係論課程の本拠は駒場だったが、本郷の授業では、斎藤真教授のアメリカ外交史が中国研究の上でも大変有益であり、京極純一教授にはバーナード・クリックの難しい英文テキストで政治学の神髄を学んだ。授業のたびに小室直樹氏（現在、評論家）が京極先生に食いついていた。

駒場では、兄貴分のような国際関係史の斎藤孝講師に助言を受け、そして国際政治史の江口ゼミの自由な学問的雰囲気からは、実に多くを学んだ。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶14

東大大学院に入学する前後から、熾（し）烈化したソ連と中国のイデオロギー論争が中ソ対立へと発展していき、私は「エコノミスト」や「思想」に、中ソ論争や現代マルクス主義を巡る論文を書き始めていた。

それらの論文

に注目してくれた青木書店の編集者が企画を通してくれ、現代

中国を分析する著書を執筆する機会を与えられた。大学院に入ったとはいえ、自分の将来がどうなるのかも定かでない不安の中で、毎晩本郷の東大図書館に残って、一年間苦闘して書き下ろした六百五十枚の原稿が、一九六四年十一月に『現代中国論—イデオロギーと

政治の内的考察—』と題して出版された。満二十八歳の時であった。

そのころまでに『毛沢東選集』

などは隅から隅まで読んであったので、神田の古本屋・篠村書店で埃（ほこり）まみれになっていた戦前のソ連共産党の哲学教科書を

青春の道標

見つけ、毛沢東の『実践論—矛盾論—の種本であることを実証することができ

き、また私自身が鼓舞された革命中国の内実が、人民公社、「大躍進」政策など、多くの問題だらけであることを分析した。

今考ええると、グラムシやトリアッティイライタリア・マルクス主義の影響も残っているけれど、「毛沢東思想」や中国社会主義を批判

中国共産党研究に没頭

することはタブーだったのに、若き日の私の最初の著作ということもあり、多くの書評で好意的に取り上げられた。半面、中国共産党べったりだった日本共産党系のメディアからはひどく攻撃され、広告も拒否された。しかし本書は以後、増補版も含めて三十年以上にわたり十八版を重ねている。

大学院の修士論文は、『現代中国論』の第二部を書き直して、「転換期中国の政治過程」と題し締め切り時間寸前に提出したが、無事にパスして博士課程に進んだ。大学院仲間でも合評会があり、全員に批判されたが、遅れて来られた指導教官の江口朴郎教授が「まあ、諸君も中嶋君のように本を書くんですなあ」と最後にぼつりと言われた言葉が忘れられない。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶15

一九六六年八月、「造反有理」を叫んで北京の天安門広場を埋め尽くした紅衛兵の出現に世界は驚嘆した。「プロレタリア文化大革命」が開幕したのである。

文化大革命を「人間の魂にふれる革命」だとたたえる風潮が強かっただけに、私は

自分の眼で確かめてみたかった。

たまたま孫文生

誕百周年記念大会

青春の道標

「これが文化大革命だ」と実感した。

その瞬間に私は拍手もなかった。

月十二日の人民大会堂での記念大会に間に合ったのである。大会の主役は周恩来総理であったが、劉少奇国家主席と鄧小平総書記の姿が見えない。と訝（いぶか）かっている、この二人が舞台の右手から遅れて登壇したが、フ

代表団の一員として訪中する機会を得たのだが、当時は国家公務員の共産圏渡航が禁じられていて、国立大学教員になったばかりの私

には、文部省からの許可が下りなかった。人事院総裁に直訴したりして単身香港経由で紅紅烈烈たる文革渦中に飛び込んで行き、十一

周恩来は『毛主席語録』をかざして「毛主席万歳、万々歳！」を絶叫し、私が抱いてきた周恩来像は眼前で崩れていった。

こうした体験を経て上海に着くと、外灘（ワイタン）の和洋飯店の壁には激しい武闘を伝える壁新聞が出ていた。紅衛兵糾察隊に追わ

「文革の真相」を雑誌に

れながら路上で拾ったガリ版刷りの小字報には「劉少奇が第一の実権派であり、第二が鄧小平である」と書かれていた。文化大革命を権力闘争の大衆運動化と見る私の視点は、こうして固まったのである。

次いで香港に滞在中、党内で孤立した毛沢東が北京を脱出して江青夫人らと上海から文革ののろしをあげたとの情報を入手した。私は当時、読売新聞機動特派員を依頼されていたので、大きな記事を書いたのだが、内容があまりにも衝撃的だとして印刷寸前にストップがかかった。そこで『中央公論』編集次長の粕谷一希氏が「毛沢東北京脱出の真相」と題して私の論文を掲載し、内外に多くの反響を呼んだ。台湾の李登輝前総統もその読者だったという。

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 ▶▶16

一九六五年秋、東京外国語大学の伊東光晴先生（経済学）から、私を歴史学（世界史）の教員に採用する話が進んでいるので、中国科の私の恩師・鐘ヶ江信光教授に会ってほしいとの思いがけない電話を頂いた。二度とこの大学の門はくぐるまいと思つて卒業した私なのに、こうして卒業七年目で母校に迎えられる。

青春の道標

とここで私が
教壇に立つて間
もなく起こった
学園紛争の嵐

れた。学生時代に学友会委員長としての私の相手方だった小川芳男先生（英語教授法）が学長になっていて、異例の推薦の言葉を教授会で述べられたという。教師としての私は、自分の学生体験に照らし、ゼミナール活動には力を尽くした。やがて私が担当

の国際関係論講座が新設されたが、『歴史と未来』と題する中嶋ゼミの雑誌は、学外の識者の寄稿も頂いて現在までに通巻二六号を数えている。約二百五十人のゼミ生が広く国内外の第一線で活躍してくれていることが本場にうれし

は、東京外大をも直撃し、東大、東京教育大と並ぶ「最重症三大学」になった。外大は中野区にあった日新学寮の管理運営問題が全共闘学生の格好の攻撃材料となり、六年十二月には大衆団交、というよりは教官のつるし上げが、報道陣を閉め出した密室の講堂で延々

三日間にわたって行われた。

東大大紛争が注目されたもう一つの理由は、全共闘を支持するいわゆる造反教官が多いことだった。文学の安東次男教授は教授会による辞職勧告を受けたが、ロシア文学の原卓也助教授（後に学長）、仏文学の岩崎力助教授らのことがマスコミでよく報じられた。

一方、まだ講師だというのに教授会代表委員に選ばれた私は、紛争の渦中に立つて学生側と対決し、坂田道太文相との交渉にも臨んで東大、東教大が中止した入試を断行した。半年近いバリケード封鎖が機動隊によって解除されたとき、私の研究室は水や油や火で徹底的に荒らされていたが、学園紛争とその人間模様は、一つの忘れ難い道程であった。

学園紛争で学生と対決

中嶋 嶺雄 ▶▶17

国際教養大学学長

若き日にその渦中で体験した文化大革命と学園紛争は、私自身の思想的な転換を大きく促してくれた。加えて一九六七年春の初の米

国旅行がある。激動の中国から帰国後、国際文化会館の松本重治先生から、日米知識人会議がウィリアムズバーグであるので、文化大革命について報告するようにとお電話を頂いた。旅費はファーストクラス分

青春の道標

学園紛争收拾後に私は外務省特別研究員として香港に留学した。一九七〇年

だから、それで妻も同伴してはとのこと。

にはモスクワの国際歴史学会で初めて英語で報告。「中国のトロツキ―」彭述之夫妻をパリの亡命先

貝塚茂樹、加藤周一、坂本義和の各氏ら、米側はE・ライシャワー、

夫クロード・カダール氏（ともに中国学者）とは生涯の友になった。

D・リースマン、ダニエル・ベル、S・ホフマン、R・スカラピーノの各氏らそうそうたる顔ぶれで、

そのころには私はマルクス主義からは遠い地点に立っていて、創刊

初の訪米、文化に圧倒

間もない雑誌『諸君』に連載した「私の香港通信」では、七〇年三月の時点で米中接近を予測することもできた。亡父が抱えた負債も香港から送金して完済し、二男二女の子どもにも恵まれた。

つい先ごろ、私が部会長を務める中央教育審議会大学院部会で、経済学者の青木昌彦氏（スタンフォード大学名誉教授）から米国の高等教育に関する優れた報告を受けた。私の隣席の彼は、六〇年安保の時期に、現代革命運動の理論家として颯爽（さっそう）と登場した紅顔の東大生・姫岡玲司（筆名）君にほかならない。あれからもう半世紀に近い歳月が流れている。

|| おわり

次回からエッセイストの夏目房之介氏が執筆します。